
that door s beyond for **あの扉の向こうには**

綾香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

that doors beyond for あの扉の向こうには

【Nコード】

N4488B

【作者名】

綾香

【あらすじ】

突然死んだ俺。いきなり現れた天使の少年。死んだ理由を思い出すが、生まれ変わる課題と言われ。。。

プロローグ 突然の死

俺はハッと目を開けた。

気がつくところには病院のベッドの上だった。

周りを見渡すと花がたくさんあった。

みんながすすり泣いている。

父さん、母さん、姉ちゃん、弟……。

そして彼女の奈々子が。

「皆、なんで泣いてんだよ。」

そう言っても誰も答えてくれない。

むしろ、俺の声が聞こえてないと言っても言っつぷりだ。

「なんで無視すんだよ。」

こんどは皆の肩を叩いて回る。

誰も振り向いてくれない。

むしろ、俺の存在なんかに気づいてないと言っても言っつぷりだ……。

ゆっくりと奈々子を見る。

奈々子の目は真っ赤に腫れていて、
美しい顔もくちやくちやだった。

……よっぽど泣いたんだな。

そういえば……どうして俺はここにいるんだろう。

そう思つて奈々子の手元を見ると、

そこには重そうな額縁に入った写真に、かけられたリボン。

……誰か死んだんだな。

そう思った。

そして、それが誰なのか、だいたい分かる気がした。

頭が痛い、そう思いたくない。

おそろおそろもといたベットを見る。

そこには……横たわる俺がいた。

奈々子の持っている写真の顔も俺。

寝ているのも俺。

よく見れば、今の俺の体はかすかに透けている。

嗚呼、俺は死んだんだな・・・。

* 第1章* 見ず知らずの少年

何かが頬につたうのが分かった。

鏡を見るとそれは確かに俺の涙。

もうはつきりとは感じられないけれど、

かすかにそれは暖かい。

「泣いているの??」

いきなり後ろから声が聞こえる。

「俺が・・・見えるのか??」

そう問いかけると後ろの声が嬉しそうに喋る。

「うん。だって僕天使だもん。」

僕・・・というには少年なんだろう。

「天使か・・・って、天使!？」

俺はバツと振り向く。

「うん。君を迎えに来たんだよ。」

少年が告げる。

少年はきつと中学1年生くらいで、柔らかな長髪。
金色で、とてもさらさらだ。

そして目は青く、とても細身だった。

こつゆう奴の相手はしないほうがいい

本能的にそう感じた。

それに俺は1人になりたいんだ。

そう思つて少年に背を向けると、

少年はひややかな声で言った。

「にげるの??」

「にげてなんか……。」

ない！そついおうと思つた。

でも、そうかもしれないと思つて、言えなかった。

「死ぬのが怖いのか??つてもう死んでるけど。」

背中をあらわにした少年が言う。

「天使つて者が、信じられないだけだ。」

「天使はいるよ。現に、ここに。」

それに死んだ人間がここにいるくらいなんだから、

天使くらいいるもんでしょ。」

それもそうか。

でもなんか、こいつの相手はしたくない。

疲れる。

「行きたくないよ。」

「だめです。」

即答。

「それに俺の身元、お前言えないだろ。」

そんな奴にはついていけないな。見ず知らずの人だから。」

「山川智樹。15歳。山中県、山中町。」

二才区に住む中学3年生。

成績不優秀。運動はバスケットボールのみ……。」

こいつ、俺の思い出したくないことまで言いやがる。」

「僕はアズ・セリス。ピー年前に死んだ天使。

ほら、もうこれで、見ず知らずの人じゃないでしょ??。」

「・・・じゃあ、俺はどうして死んだんだ??。」

「それは言えません。」

「なんでだ?。」

「それを思い出すことが君の課題だから。」

「このままここにいると悪魔が迎えに来ちゃうよ、あの世に。

天国と地獄・・・どっちがいい?。」

「・・・天国。」

「決まりだね!!。」

そう言うと天使はニコツと笑った。

* 第2章* 天使の過去

天使が俺を持ち上げたたん、

俺の意識は飛んだ。

いや、とんでないのかもしれない。

ただボヤーンと周りが真っ白になって、

一面光の世界みたいだった。

「おい。」

「ん、ああ。何？」

気がつくともうついたらしい。

足が地に付いた感触がした。

でもそれはもこもこしていて、

まだあたりは一面光の世界だった。

「ここ・・・どこだ？」

「ここ？ああ、ここは天界ですよ。」

「天界・・・？て、天国？」

「天国とはちょっと違いますね。」

天国はちゃんと死んだ人が行って、

生まれ変わる準備をするところだから。

ここはその一歩手前。」

周りを見渡してみると、

周りにはうす黒い陰がもやもやいる。

「なんだ？黒いもやもやしかいねーぞ。」

「それは死んだ人です。」

あなたも周りからはそう見えていますよ。」

「ふうん……。」「

初めて見るものばかりで、俺は生返事しか出来なかった。

「・・・で、俺はここで何をすればいいんだよ。」

「死んだ理由を思い出してもらいます。」

「なんで?」「

「思い出さないと生まれ変われないから。」

「生まれ変わりたくなんか・・・。」

「いつまでも甘えてないで下さい。」

時間が押し詰まってるんですから。」

僕だって暇じゃないんですよ。」

「なんでてめー、年下の癖に。」

「はい？君のほうが年下ですよ。」

僕は死んでからこの姿でもう数10年とたってますから。」

「何歳だよ・・・。」

「だから、さっさと思い出してください。」

「俺は・・・今の思い出を忘れたくねんだよ。」

「ああ、それなら安心して下さい。」

「な、何だ？」

俺は心のそこから期待する。」

「思い出そうと思いださまいと、時間切れになれば、

記憶ぶっとびますから。」

「……………」

安心できない。

「なので聞いて下さい。どっちにしろ忘れるんなら、生まれからるほうがお得でしょ？」

君は、死んだ理由を思い出さなくてはなりません。」

「それは強制？」

「もちろん。」

「時間以内に思い出せなければ……………」

「!?!」

「永遠の苦しみ、悪夢を見ることになります。」

「それは……………」

おそろおそろ尋ねる。

「それは……………」

天使……………」

「じゃあ君……………」

「・・・思い出したくもなかったから。」

「・・・ごめん。変なこと聞いて。」

でもどうしてそれが苦しみ・・・悪夢なの??

見たところ楽しそうだけど。」

俺がそういうとセリスは冷ややかに笑って、

「そんなの・・・なってみないと分かりませんよ。」

と言った。

でもその顔は、確かになきそうだった。

* 第3章* 天門の扉

「いい？君はどうして死んだか、
思い出さなきゃいけないんだよ。

決まりごとはいろいろあって、それを破ればアウトだから。
決まりごとは全部で5個。

絶対に破らないこと。」

さっきあんなことがあったと言うのに、

セリスはもう忘れたとでも言うように淡々と喋る。

セレスが言うに、決まりごとは、

- ・途中で自決しない。
- ・地上界のものに危害を加えない。
- ・もちろん、話しかけるのもだめである。
- ・地上界のものに触れてはならない。
- ・もちろん動かすのもだめ。

この5個。

「って、ちょっと待って。俺ここに来る前、皆の肩にさわっちゃったんどけど・・・。」

「それなら大丈夫。言い忘れてたけど、

親族は気づかないから、触ったに入らないから。」

「ふうん・・・。」

なんだかんだ言って、思ってたより少ない。

でもかなり、守るのに難しいものばかりだ。

俺・・・守れるかな・・・？

奈々子や・・・母さん父さんに会って、

声をかけずにいられるかな？

・・・できねえよ。

「セレス・・・。」

「はい？」

「俺・・・それ守れねえかも。」

「どれをですか？」

「声かけちゃダメって奴。」

見るからに頼りない顔で俺は言う。

「……………天使になりたいの？」

「なあ、具体的に天使はどうして辛いのか、教えてくれないか？」

「そんなこと聞いてなにがいいの？」

セレスの表情が凍りつく。

「いや、心構えがほしいというか。

どれだけ辛いかわかったら、

なりたくないって理由で頑張れる気がして。」

「聞かないほうがいい。」

「何で？」

「いいからさっさと行けよ！」

セレスとは思えない口調で、

セレスは俺に罵声をあびせた。

「あ……行ってきなよ。」

気まずそうにセレスが直す。

口調は柔らかくなったが、確かにそれは強制だ。

「わり、じゃね。」

俺は現世へと続くという、天門の扉を大きく開け放った。

第4章

アンケート用紙

「うわあああああああ!!!!」

扉を開けたとたん、そこは上空だった。

嗚呼、さっきのもこもこは雲だったんだな。

うすれていく頭でボヤボヤと考える。

それにしてもすごいスピードだ。

もはや「落下」「じゃないか？

いや・・・「落下」なのか。

頭が痛い。

「つつつつ」

地上につく5mくらい前に、

速度がブレーキがかかたよつに急に弱まった。

すごい衝撃・・・手荒だな・・・天界って。

そうして俺はゆっくりと地面に降り立った。

「ふう・・・。」

周りには人がたくさんいるのに、

俺の存在に誰も気がついてくれない悲しさ。

セリスが言うに、話しかけて答えてくれるのは、

親族以外らしいから、

存在に気づいてなくても答えてくれるのだろうか？

でも無駄にあと5回を使いたくない。

触れるのもあと5回。

天界との行き来は自由だけど、

1回の移動に数10分はかかるし、時間がもつたいない。

なんせ制限時間はたったの48時間・・・2日なのだから。

そうして俺はとりあえず、元居た病院に行った。

病院の各室からはたまにすすり泣きが聞こえる。

病院は悲しいところだな。

自分の病室に入って、

なおも横たわる俺を見て心が痛んだ。

葬式やらなにやらに行っているのか、
病室に人はいない。

「あ！いいこと思いついた！」

誰も答えてくれない独り言もかなしい。

そう思いつつも行動を始める。

まず紙を持つ。

これでふれるのは1回目、あと4回。

次にペンを持つ。

これで2回目、残り3回だ。

俺は紙になるべく母、和子の字ににせて文を書いた。

「奈々子さんへ。」

いつも智樹がお世話になっていました。

そこで聞きたいことがあるのですが、

直接は聞きがたいことなので、紙に書きました。

1、智樹が死んで何を思いましたか??

【
2 智樹は死ぬ前、死ぬことを予想していた、
】

そのようなこと、または近いことをいつてましたか??

【
】

3 智樹の死因はなんですか?

【
】

有り難うございました。 和子

最後の質問はちょっと卑怯だし不自然だけど。。

まあいいだろう。

「カサ。。。」

回数を減らさないよう、机に触らないように紙を置く。

紙の存在くらいなら、きずいてくれるだろう。

すると、

「ガラガラガラ。」

なおも目を赤くはれ上がらせた奈々子が、

病室に入ってきた。

「……………」

奈々子が紙の存在に気づく。

「この字は……和子さんからね。」

そう奈々子は言うと、書き始めて5分、

いきなり泣き出してしまった。

そつと用紙をみると、死因の欄が空欄だ。

「……………」

しばらくして落ち着くと奈々子はなにやら文字を書き込んだ。

【そんなこと、思い出したくありません。】

……………空振りかよ……………。

しかも泣かせちゃった……………。

「ガラガラガラ」

俺が後悔の余韻にひたっていると、

和子が病院にはいりこんできた。

俺はとっさに紙をとり、棚の影に隠れた。

「あら？奈々子ちゃん。どうして泣いているの？」

「・・・和子さん・・・ひどい。」

どうしてあんなものを私に書かせるんですか？

そんな人だとは・・・思いませんでした！」

「紙・・・何かしら？紙とは・・・？」

話に変な方向に向かってきた。

「この紙ですよ！・・・あれ？ない！紙が・・・。」

「・・・？変な奈々子さん。」

よっぽど智樹が死んでショックだったのね。

休んだほうがいいわ。」

そういつて、和子は引き気味で病室を出て行った。

「・・・??？」

その後、奈々子は尚も戸惑っていた。

第5章

脱力

俺・・・だめだ。

何も出来てない。

ただ奈々子に辛い思いをさせてしまっただけだ。

俺・・・なにやってんだ。

1回天界にもどって頭を冷やそう・・・。

そう思って俺は、セレスから渡された、

押せば天界に帰れるというリモコンのボタンをおした。

「うわー！」

すると体がふわっと浮いて、変なイスが出てきた。

なんだかふわふわしている。

これも雲なのだろうか？

「おいしょ」と体を起こしてイスに座る。

意外とすわり心地は良い。

するとイスはひゅうつつと浮いて、上空へと跳びたつた。

「行きと違ってずいぶん丁寧だな。」

そんな独り言を残して。

第6章 天界ホテル

「おれ？戻ってきたの。」

一人でトランプをやっていたセレスが言う。

「何かあったの？時間がもったいないよ。」

「俺……………」

「わかったてるよ、見たもん。」

「なんだよ、聞いたいて。」

「……………わかるよ。」

「え？」

「その虚しさ。何も出来ない悔しさ。」

話しかけても答えてくれないせつなさ……………

僕はそれであきらめたんだから。」

「ふうん……………」

なぜだろう。

セレスはいつも過去の話をするとき泣きそうになるんだ。

それほど悲しいのだろうか？

いや、セレスは思い出してないし・・・。

じゃあなんで・・・。

「まあいい。休んでいきな。」

「・・・・・・・・おう。」

何もなただ真つ白な世界だと思った天界だけど、

以外にもいろいろなものがあった。

たとえば俺が泊まることになった大きな白いビル。

このビルの中には数々の部屋。

俺みたいな死人が、休みに来るところらしいけど、

以外にも設備は整っている。

なんだかすごい高級ホテルみたいだ。

食事・・・おやつは結構来るし、

お風呂とかもある。

あ、お風呂といっても水の感触わかんねえから、

たわしが1個おいてあるだけ。

たわしで体を強くこするとかすかに感触があつて、

それが結構気持ちいい。

垢もでてきたりするから、天界・・・死人専用のものなのかもしれない。

でもかなり強くこすってるから、

これが現実だったら、かなり腫れ上がるだろう。

部屋数は、ここにくる奴は、

みんな俺みたいに制限時間があるやつばかりで、

ちょっと休んで出て行くから、少なくともすむみたいだ。

まわりからみたら俺もそうなんだけど、

まわりにいるのはみんな黒いモヤモヤだから、

同じ死人同士ではなせないってのは悲しいな・・・。

「あーあ。」

俺は雲で出来たらしきベットにこしをかけ、

大きく横になった。

第7章 穴

「ふう〜。」

ちゃんと冷静になって考えてみると、

この少しの時間に、いろいろなことがあったな・
・
と思う。

現実で言うと、どのくらいたってるんだろつ。

期限は2日で、まだ期限切れてないから、

2日たつてないのは確か。

1日ぐらいかな・・・？

とりあえず、もう時間がない。

このまま未練残して、消えるなんて・・・嫌だもんな。

セレスのようには、なりたくない。

時間を無駄にしないように、

この今、瞬間にも考えよう。

俺はどうして死んだんだ？

ちゃんと、家族のこととか、周りのこととか、

ちゃんとしっかり覚えているのに、

死んだときのことだけ、

ぼっかり、穴が開いたみたいに思い出せない。

・・・なぜだ？

課題だからと、セレスたちが消しているのか？

それとも、ショックで忘れているのか？

どっちにしろ、思い出すのは無理だろう。

やっぱり、奈々子達に調査するしか・・・

ないのか・・・？

*** 第8章* 2度目の地上**

思い立ったらすぐ行動。

生きてるまでの俺のモットー。

俺は天門の扉の前にたった。

前回もう体験した。

だから心構えはできてるー！。

と言いたい所だけど、

やっぱり怖いものは怖いんだよ。

この天門も、扉開けたらすぐ上空、じゃなくて、

踏み台でもあればいいのに。

・・・それじゃあいつまでたっても

飛び降りれないか・・・。

こっちのほうがいさぎ良いよな。

そう思って俺は天門の扉をあけた。

「わあああ！やっぱ怖ええんだよ！」

また上空だ。

でもこんなこと言えるだけ、

余裕が出来たってことだよな。

そんなこと思ってる間に地面についた。

また直前でブレーキがかかったから

死にそうになったけど。

……ってもう死んでるか。

ていうか、来たのはいいけど具体的に

どうしたらいいんだろう。

ウロウロウロウロ

俺はその辺をうろつく。

なにかないかな……。

.....あそび、入ってみよう。

* 第9章* 占い師

俺が入ろうと決意したのは、

50メートルほど先にある建物。

看板には

「迷える魂 占います」

と記されている。

なんだか怪しい気もするが・・・。

俺にぴったりだからと入ってみることにした。

と言っても俺が見えるのか？

「お入り。」

俺がドアに近づいて、

どうやって入ろうか迷っているとなかから声がした。

鍵は開いたようだ。

「失礼しまーす・・・。」

ドアはいとも簡単に開いた。

死人でも空けられるようになっていたのか・・・？

「おや・・・君は天界の住人だね？」

後ろから声がする。

ゾクっとする声だ。

扉から入ったはずなのに、なぜうしろから声がするんだ？

そう思っただけがバツと振り返ると、

もうそこにドアはなくて、

広い空間が広がっていた。

そしてその真ん中には・・・声の主。

しわしわとしたおばあちゃんだ。

「ばーちゃん、俺が見えんのか？」

「姉さんとおよび。」

「・・・ねーさん。」

・・・なんか変なおばあさんだな。

「あんたは天界の住人だね？」

もう一度おばあさんが言う。

「・・・はい、って、死人は天界しか行き場がないじゃないですか。」

「おや、知らないのかい？2種類あるんだよ。」

「??？」

「しょうがないな・・・おしえてあげよう。」

死人の行き先には天界と地界の二つある。

まあ簡単に言えば天国と地獄だ。

「・・・あなたは悪い行いをしてないようだから、

天界にいったんだろう。」

「・・・そうなんだ。」

天界でよかった・・・。

「で、何をまよっとるのかい？」

「・・・どうやって死因を思い出すかです。」

「そんな当たり前のことを聞くのかい？」

「・・・へ？」

おばあさんの目がするどくなる。

「そんなの、自分で調べるしかないだろう。」

私を知るはずないじゃないか。

がんばってしらべな。ほら行った行った！」

つまらない悩み（あのおばあさんにとってだけど）だと分かる
と、

一気に追い出されてしまった。

なかったはずのドアもいきなり現れて、

いつのまにか出されている。

……時間の無駄だったな。

俺はまたウロつきだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4488b/>

that daoor s beyond for あの扉の向こうには

2010年11月23日03時17分発行